

# 日本古代稲作の経緯

隠された古代史を探索する会

主幹 雑賀弘行

日本で稲の栽培が始まったのは、いつ頃だろうか。縄文時代には、やせた土地にも雑草としてイネ科の稗が生育していて、縄文人はその稗を採取してマグネシウム、鉄分、カリウムなどのミネラルを取っていた。その稗に混じって原始的な稲も。同じように、粟もイネ科の一種で、今でも雑草として見られる一年生植物でエノコログサ。このエノコログサ（粟）を縄文人は栽培し、種子の部分を脱穀・脱稃して粉状にして主食としていた。中国青海省民和回族土族自治县官亭鎮喇家村の喇家遺跡では、4,000年前には粟を栽培し、粉状にした麵の遺物が密封された器の中から発見されている。青森県の三内丸山遺跡では、4,200年前には稗



エノコログサ

（イヌビエ）を栽培していたことが確認されている。中国大陸と陸続きでない日本でも、中国からの偏西風によって、稗、粟、稲に含まれているガラス質の微粒子細胞のプラント・オパールがやって来て、日本で成育し、縄文人は雑草として生えていた稗や粟を栽培するようになった。稲作栽培ができる技術も、稗や粟で培った技術で縄文人は熟したのだろう。多分、稲も稗や粟と同じイネ科なので、食用に使えることを知っていたと思う。岡山県総社市の南満手遺跡で発掘された土器の破片から、粃痕らしき凹みがあるのを発見し、調査したところ米の粃跡だったそうです。その土器は、縄文時代晩



稲のプラント・オパールが発見された岡山県の遺跡

朝寝鼻遺跡（土壌から約 6,000 年前の栽培種の稲の細胞化石）  
姫笹原遺跡（土器の胎土中から約 5,000 年前の稲のプラント・オパール）  
南満手遺跡（土器片から約 3,500 年前の稲のプラント・オパール）

期に製作されたもので、その土器から稲のプラント・オパールが発見された。3,000年前には、岡山で稲作が行われていた。さらに、この南満手遺跡から出土した縄文時代後期中葉の土器からも稲のプラント・オパールが発見され、稲作が 3,500 年前に遡る。さらに、姫笹原遺跡では 4,500 年前の稲のプラント・オパールも発見された。縄文人が貝殻を捨てた場所、朝寝鼻遺跡の貝塚では、何と 6,000 年前の稲のプラント・オパールが発見されて驚かされた。青森県三内丸山で縄文人が生活していた頃、岡山県縄文人は野生稲の存在を知ってい



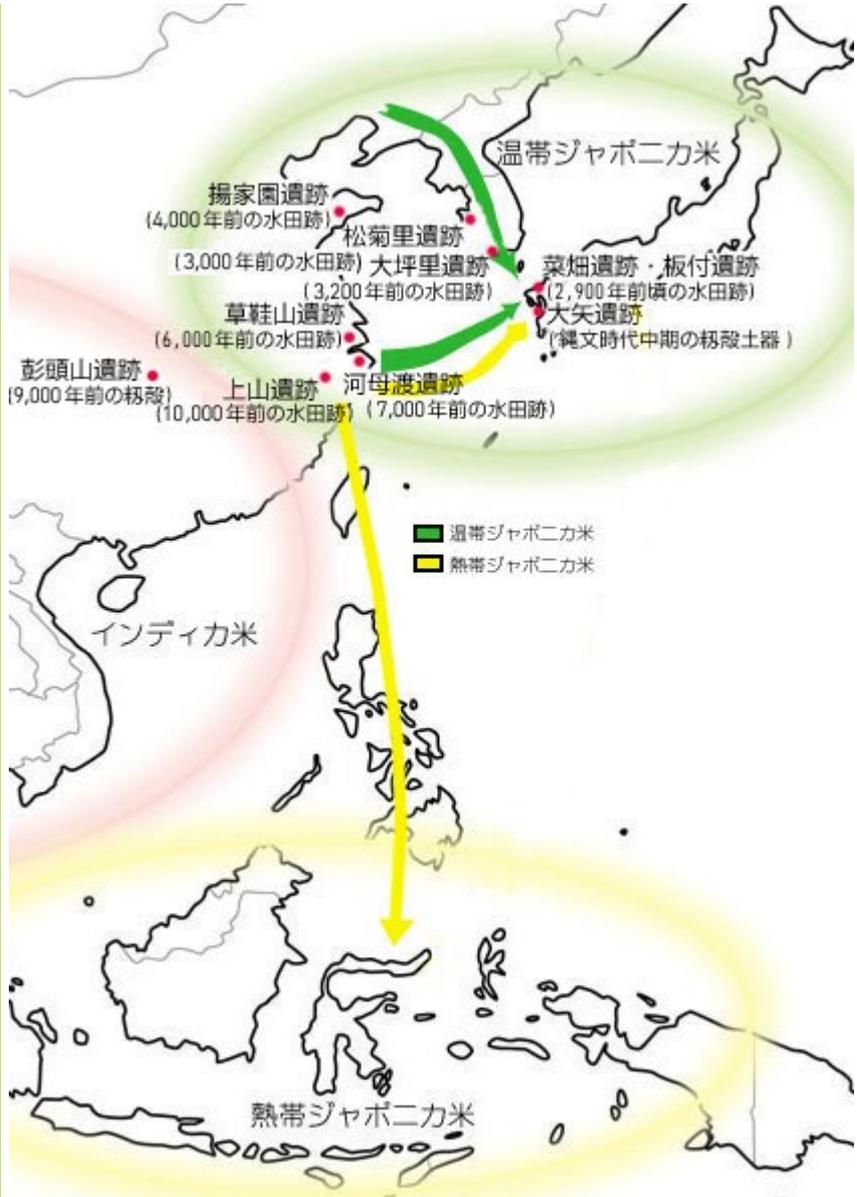
た。或いは、畑で栽培する陸稲をして、食用としていた。

2万年前の日本列島は、北の樺太、北海道、本州が氷河の影響で陸続きでした。また、韓国と対馬列島と九州の海峡は、現在よりはかなり狭く、大陸から葦舟で渡ってこられるくらいでした。その頃、日本に渡ってきた人達が縄文人を形成していきます。Y染色体パプログループで言うと、D-M55ですね。1万3000年前に最終氷河期が終わり、地球の温暖化により、氷河が溶けて、現在の日本列島の姿を現します。でも、海岸線は、砂浜があり、平野が広がっていたわけではなく、湿地帯がたくさんありました。そんな湿地帯に繁殖していたのが葦。この葦を利用して、縄文人は葦舟を作り、海に出て、魚や貝を採取する漁生活を送っていました。最近では、あまり見られなくなりましたが、田舎の縁側に暑さしのぎに掛けてあるすだれの原料は、葦です。漁にでる船としては、木材使用の船よりも、葦使用の船の方が主流でした。

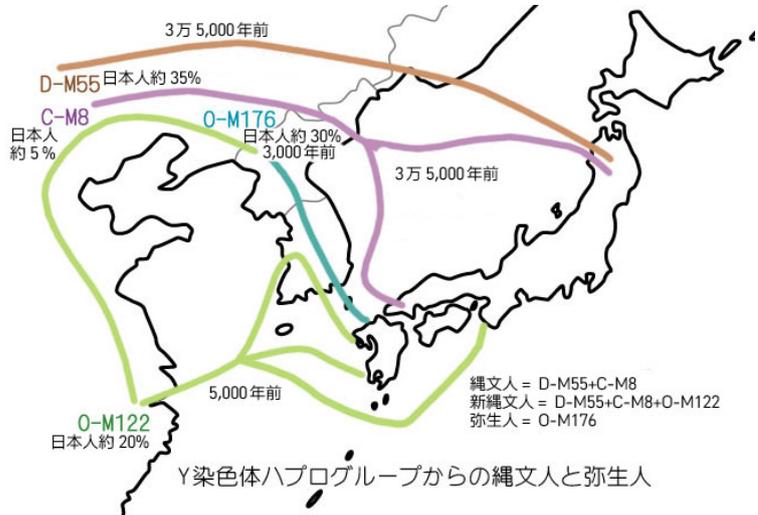


この葦は、イネ目のカヤツリグサ科に属していて、イネ科とは兄弟的存在で、同じように湿地帯に生殖していました。特徴は、多年草で成長すると1年間で全長5メートルぐらいに伸びる。その性質のため、縄文人は、葦舟や竪穴式住居の屋根に使用していました。縄文人は、船や住居を造るために湿地帯に行き、葦を採取する過程で、目立たない野生稲を見つけたのでしょう。その野生稲を持ち帰り、畑に植えたところ稲が育った。陸稲ですね。この段階では、まだまだ現在の米には至らなかった。この野生稲は、雑草で多年生のため茎の部分が枯れても、根が残り毎年、その根から生殖するタイプであったが、栽培されるようになって、人的に枯れるようにして、量産するために一年生植物にしたのが現在の稲です。岡山県の朝寝鼻貝塚から発見された稲のプラント・オパールは、雑草であった野生稲を長い歳月を掛けて食用の米にできるようになった証拠です。それが今から6,000年前。この段階では、縄文人の主食としての米ではなく、稗や粟などの栽培とともに存在していた稲に過ぎなかった。

現在、私達が主食としての米は、温帯ジャポニカ米で、この米の元は雑草が起源。野生稲には、アフリカイネとアジアイネがあって、そのアジアイネを栽培化したのがインドや東南アジアや中国南部で栽培されているインディカ米とジャポニカ米の2種。簡単に言えば、米粒の長いのがインディカ米で、短いのがジャポニカ米。インディカ米は、寒さに弱い高温多湿の地域で栽培されている。インディカ米とジャポニカ米の分岐点は、栽培化される以前の7,000年前以上とされている。中国の上山遺跡で1万年前の籾殻が発見されて、稲作の発祥地だと言われています。そして、野生稲からジャポニカ米に品種改良し、水田による稲作を始めたのは、当時の揚子江周辺の人達。7,000年前の河母渡遺跡の水田跡や6,000年前の草



鞋山遺跡の水田跡が残っているように。その温帯ジャポニカ米は、寒冷な気候に強く、湿気  
 の多い温帯気候で、夏期には比較的高温になる亜寒帯、偏西風が吹く中国中北部や日本の気  
 候に適していた。この温帯ジャポニカ米は、縄文人が野生稲から改良して栽培していた稲で  
 はなく、朝鮮半島南部から縄文  
 時代晩期に中国の水田技術とと  
 もに、九州北部にもたらされ  
 た。俗に弥生人といわれているY  
 染色体パプログループの O-M172  
 の人達です。それまでも、長  
 崎県天草市の大矢遺跡の縄文時  
 代中期の土器に熱帯ジャポニカ  
 米の籾が付着していたように、  
 草鞋山遺跡や河母渡遺跡がある  
 揚子江下流から、ジャポニカ米



の原種が、或いは温帯ジャポニカ米や熱帯ジャポニカ米を持ち込んでいたと思われます。その人達が Y 染色体ハプログループの O-M122 の遺伝子をもって日本にやって来た。そして、従来の縄文人と混じって、新縄文人を形成した。岡山県の朝寝鼻遺跡や姫笹原遺跡や南溝手遺跡の稲のプラント・オパールは、そんな新縄文人によって稲作が行われたと思われます。刻目突帯文土器を使用していた新縄文人は、縄文時代が 1 万 2,000 年続いた年月の中で、3 万 5,000 年前に大陸から日本に渡ってきたハプログループ D-M55 の Y 染色体を持つ人達と中国北部からと中国の揚子江周辺から渡ってきたハプログループ O-M122 の Y 染色体を持った人達の混血。この新縄文人は、畑で熱帯ジャポニカ米を栽培していた。これが縄文時代後期の稲作でした。

縄文時代晩期になって、朝鮮半島から水田技術（灌漑技術）が入ってきて、佐賀県唐津市の菜畑遺跡や福岡市の板付遺跡の水田跡のように温帯ジャポニカ米を栽培し始める。2,900 年前から日本（北部九州）に水田による稲作を朝鮮半島経由で伝えた人達は、ハプ



ログループ O-M176 の Y 染色体を持った人達。日本では弥生人と言われる人達です。そして、この地に永住した弥生人は、今まで使っていた無文土器に新縄文人が使っていた刻目突帯文土器のよいところを加えて、遠賀川式土器として改良します。稲の収穫が順調にいくようになり、人口も増えた段階で北部九州から温帯ジャポニカ米の粳を持って、瀬戸内海を通過して、岡山県から近畿圏に移動する。

水田による稲作の担い手が温帯ジャポニカ米の粳と遠賀川式土器を持って近畿圏まで進出していった。この水田による稲作の普及のスピードが最も早かったのが、大阪府高槻市の京都大学大学院農学研究科附属農場の移転に伴って 1966 年からの発掘調査が行われ、2,500 年前の水田跡が発見され、400 年足らずで近畿圏までたどり着いていた。この安満遺跡で発掘された土器は、遠賀川式土器と刻目突帯文土器とが混じった状態で発見されている。その他にも、縄文時代からの遺物が存在する滋



縄文時代晩期から  
弥生時代前期の水田跡

賀県守山市の服部遺跡では、縄文晩期の水田遺構は発見されていないけれども、弥生時代前期の地層から縄文時代の刻目突帯文土器と遠賀川式土器が同時に発見されていて、遠賀川式土器と温帯ジャポニカ米の粃を持ってやって来たことが遺物から察しがつく。

現在わかっている 2,600 年前頃から 2,300 年前の水田跡では、瀬戸内海沿岸の岡山県岡山市北区いずみ町の津島遺跡と津島江道遺跡、伊勢湾の海岸線上の三重県多気郡明和町竹川の筋違遺跡がある。明石川下流に位置する兵庫県神戸市西区の玉津田中遺跡があり、大阪平野が河内湾であった頃の大阪府茨木市中津町の牟礼遺跡。生駒山から流れてくる恩智川の流域で大阪府八尾市と東大阪市を跨いだ位置にある池島福万寺遺跡。昔、琵琶湖から流れてくる巨椋池沿岸の京都府八幡市内里町の内里八丁遺跡がある。これらの遺跡は、海岸線上或いは川縁りや湖畔に位置する。田に水を引くのに適した場所であった。そして、熱帯ジャポニカ米の粃と温帯ジャポニカ米の粃が、刻目突帯文土器や遠賀川式土器に付着している。縄文時代に狩猟採集生活をおくっていた縄文人と北部九州から瀬戸内海を通り、大阪府の古代河内湾にやって来た弥生人が共同生活をするようになったことを意味している。さらに、2,300 年前から 2,200 年前には遠賀川式土器を使用していた人達は、東日本にも進出し、温帯ジャポニカ米が寒冷地方には育たないと言われていた東北地方の青森県弘前市三和の砂沢遺跡や青森県南津軽郡田舎館村の垂柳遺跡にまでやって来て、水田跡を残している。

この 2,300 年前から 2,000 年前まで、西日本各地に水田による稲作が浸透し、この間に中国から青銅器が入ってきた。農機具も木材や石材を使用していたのが青銅器に変わり、稲の出荷量が増大していった。広大な水田を持つ集落が出来てきて、新たに鉄器を導入する集落も現れ、集落の中に織物や青銅器や鉄器を製造する工房も現れてきた。水田が拡大するにつれて、集落同士の土地の所有権争いも。そんな争いに勝つため、弓矢の矢尻も石材から鉄器に。さらに青銅器の剣から鉄器の剣に変化していく。そして、大集落にはリーダーが出現し、北部九州では末羅国や伊都国や奴国などの小国家が誕生していった。西暦 100 年代後半には倭国大乱が起きて、北部九州や四国や岡山県より西側の中国地方の小国家同士の戦いが起こり、領地の奪い合いが行われた。ただ、この倭国大乱には巻き込まれなかった近畿圏では、河内平野や奈良盆地の開拓が進み、水田の拡張が行われた。その結果、水路の変更や灌漑の設置のため、地面を掘り起こした余った土を盛って、リーダーの墓地にした。それが古墳で、西暦 200 年後半から 600 年頃まで続いた。